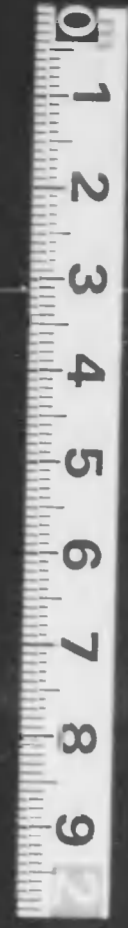


寫眞週報

編輯局報情
二十二年二月十四日第九十七號

大東亞戰爭一周年



詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス
朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕
カ眾庶ハ各其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ
抑、東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ至願ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ奉々
措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今
ヤ不幸ニシテ米英兩國ト學端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ
眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ擾亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸
ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃
ミテ兄弟尚未タ牆ニ相闔クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋
制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス刺ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ
有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回
復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々
經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年
ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切
ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和
ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

昭和十六年十二月八日



宣戦の大詔を拜してから一、二年、感激に魂の打ちしびれ、血のたぎり立つを覚えたあの日をいまはつきりと思ひ起し、戦勝のうちに迎へた今日の日をじつと直視しよう

大御稜威の下、わが陸海將兵の善謀勇戦により開戦當初から到るところ敵戦力を粉碎し、廣大なる地域を掌中に収めて世界の相貌を一變せしめたが、敵もその豊富な資源と生産力を持って軍備擴充に全力を傾け、隙あらばわが手元に斬り込まんものと營々その刃を研ぎすましてゐる。絶対に油断はならぬ。わが陸海軍はこれに備へて外、その反撃を撃碎して寸分の隙も見せず、内、急、兵力を増強し、生産陣また死力を盡してその全能力を發揮し、総合戦力において何一つ敵に劣らず、あくまで積極作戦に出て敵を撃滅せざんばやまぬ決意を固めてゐる

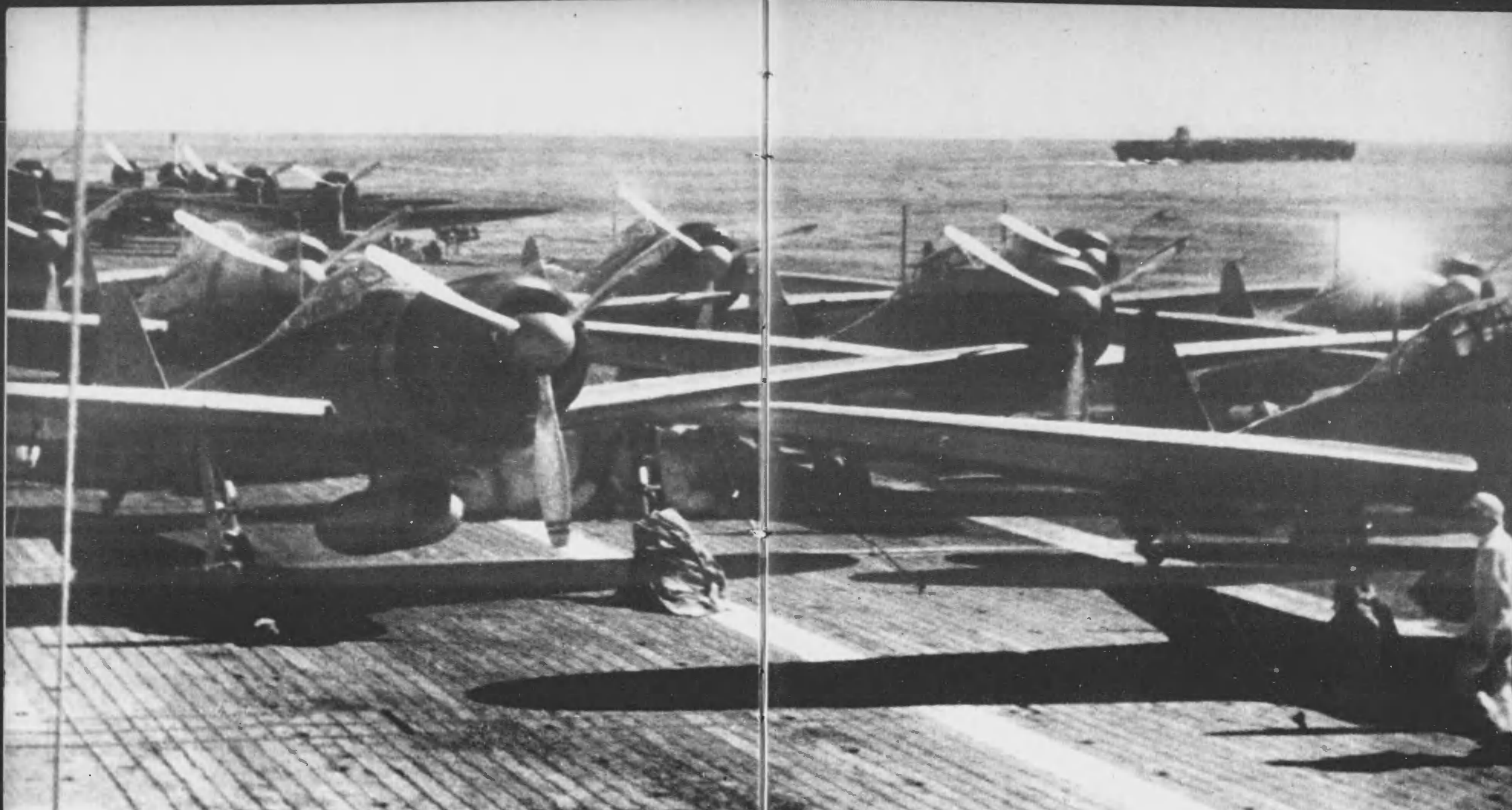
こゝに翻つて我々のこの一年の生活はどうであつたか。純一無難のあの日の「日本人の心」が果してその日／＼の生活の中に生かされてきたであらうか。我々銃後の戦友が、あの日の決意のゆるむたび、戦ふ日本人として恥ずべき行ひを敢へてするたび、護國の忠義をして國を思うて泣かしたしなかつたらうか。凡そ戦ひは必勝への意志と信念、信念と信念との頑強合ひである。この意志と信念にひたひたのつた方が負に輝かさねばならぬ。それを思ひ、これを想へば爲すところの足らざるをはぢるのみ

大東亞戦争一周年、今こそ決意を新たにし、戦争生活に徹して開戦第二年に突進しよう

(寫眞は昨年十二月八日宣戦の大詔を拜して宮城二重橋前に忠誠を誓ひまつる民衆)



るみを字文大の國殉に宇眉の軍陸國帝

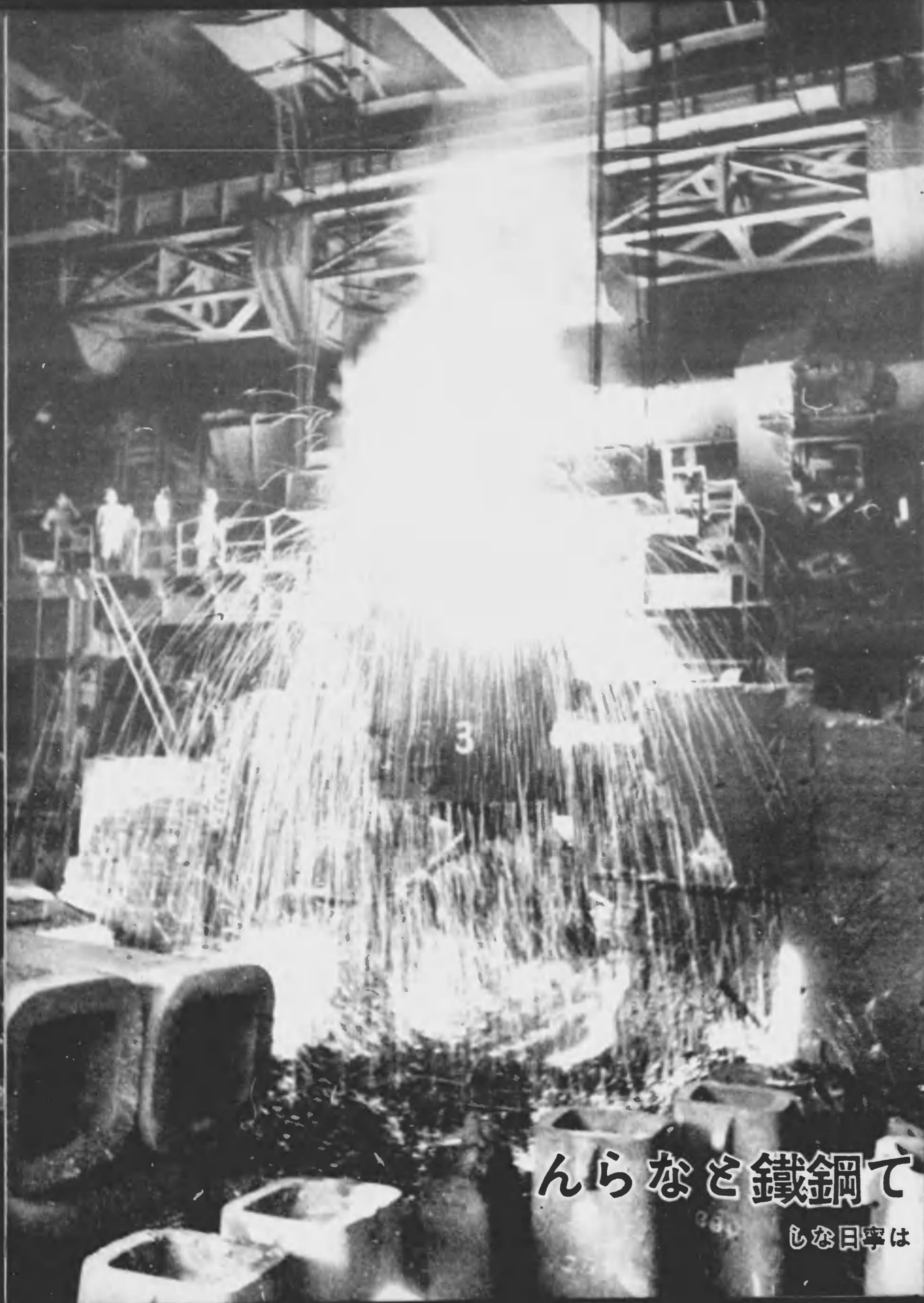


帝國海軍と空に難國を睨す

わが航空母艦発着甲板に待機する新鋭機

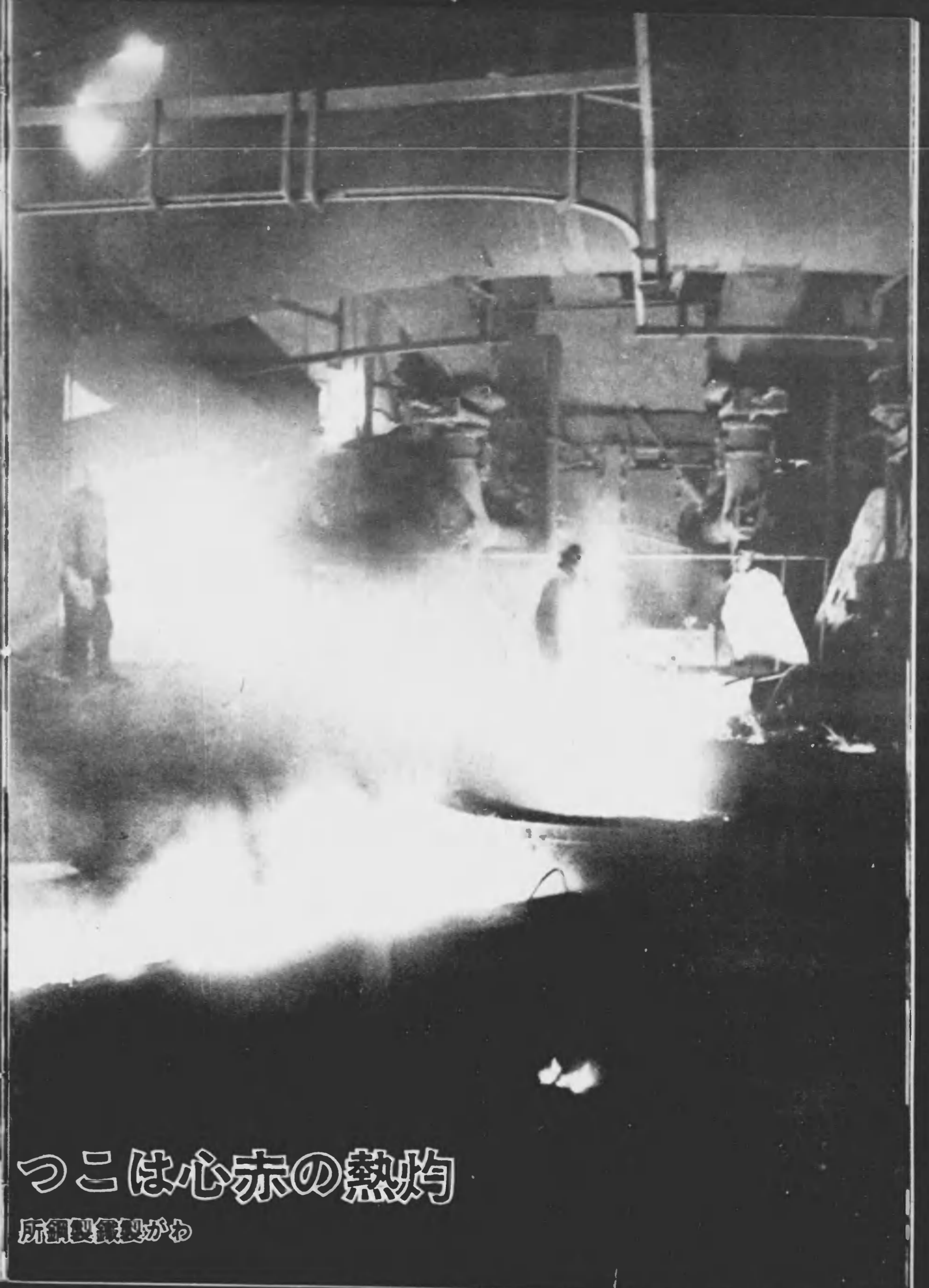


撮影
牧島海軍報道班員



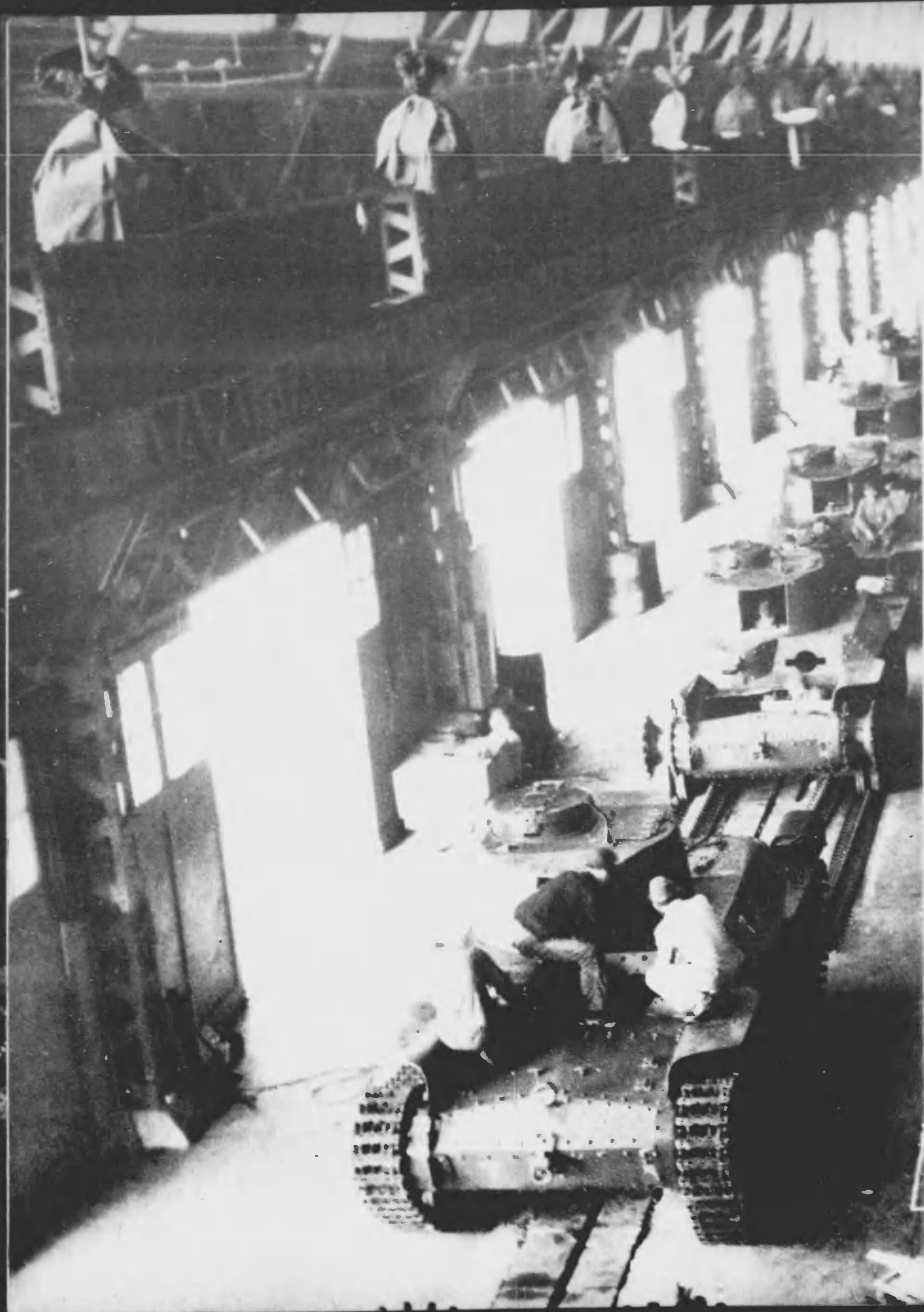
てんらなと鐵鋼

しな日寧は

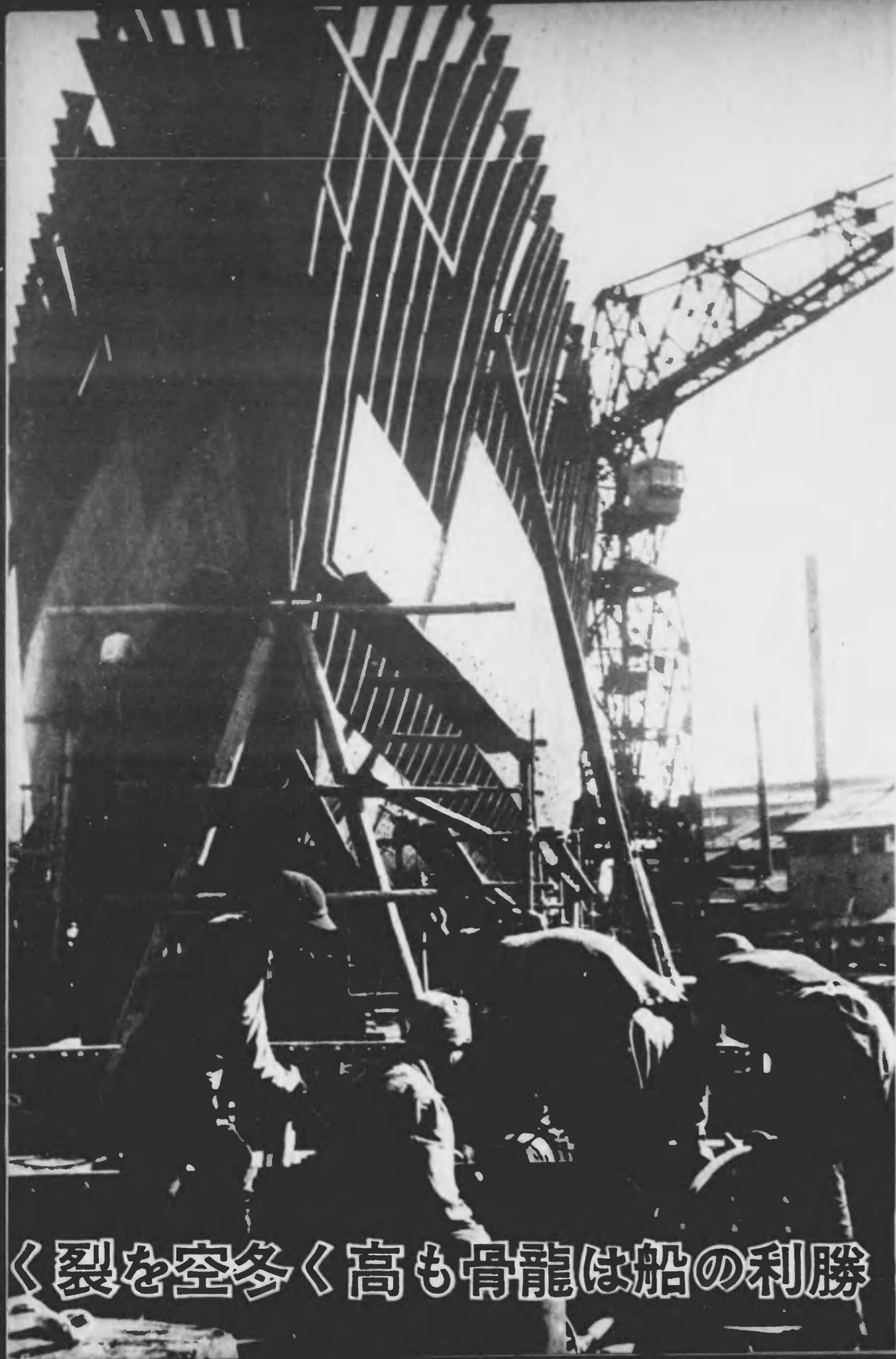


つこは心赤の熱灼

所鋼製鐵製がわ

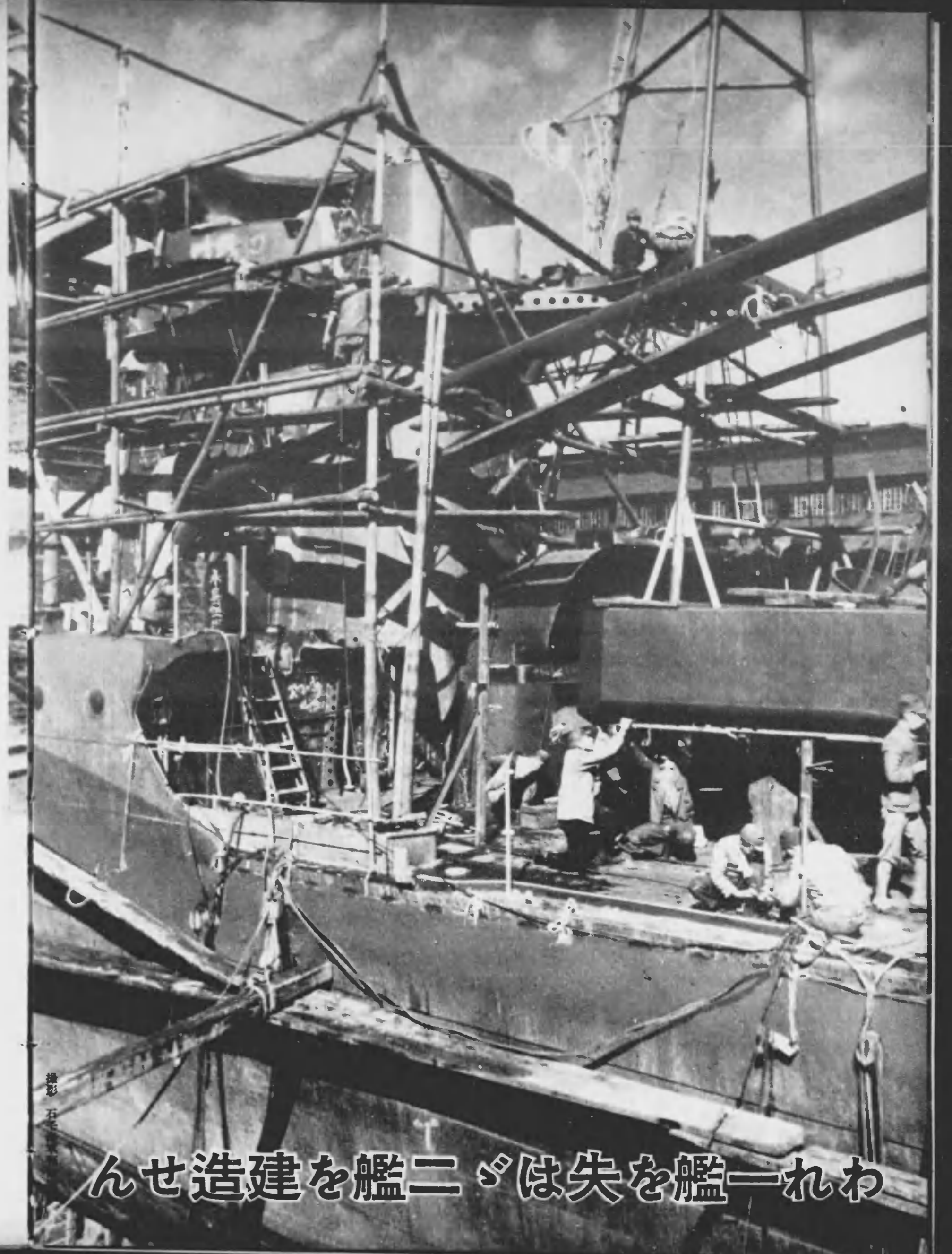


たつ乘に道軌限無は産生の車戦



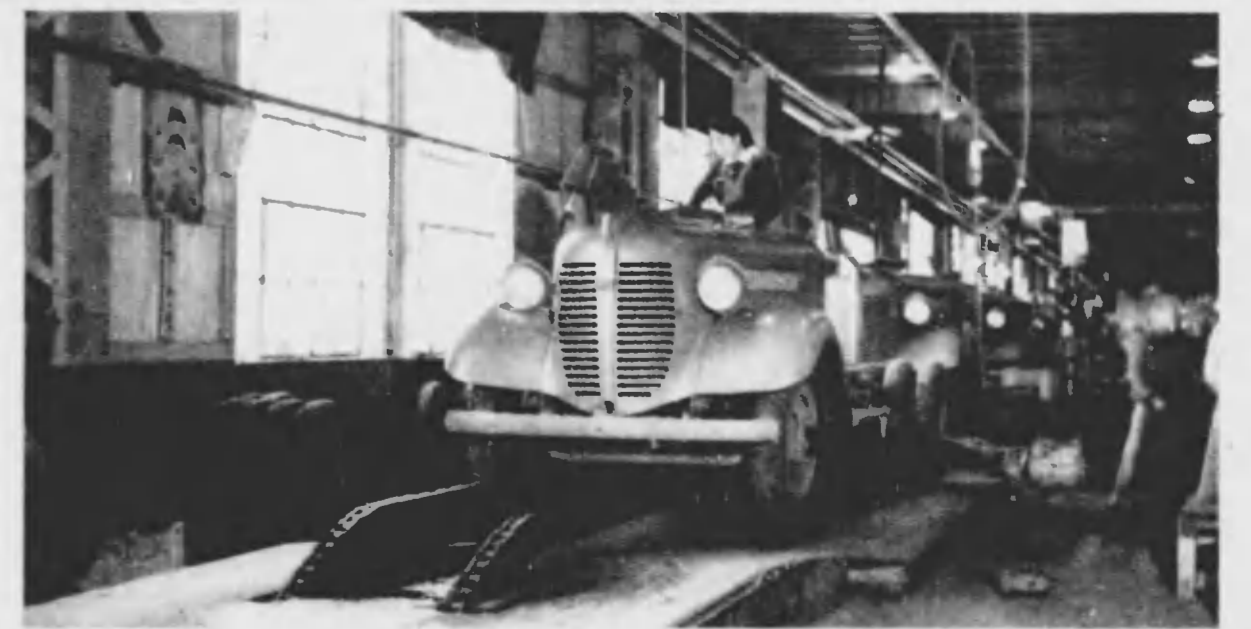
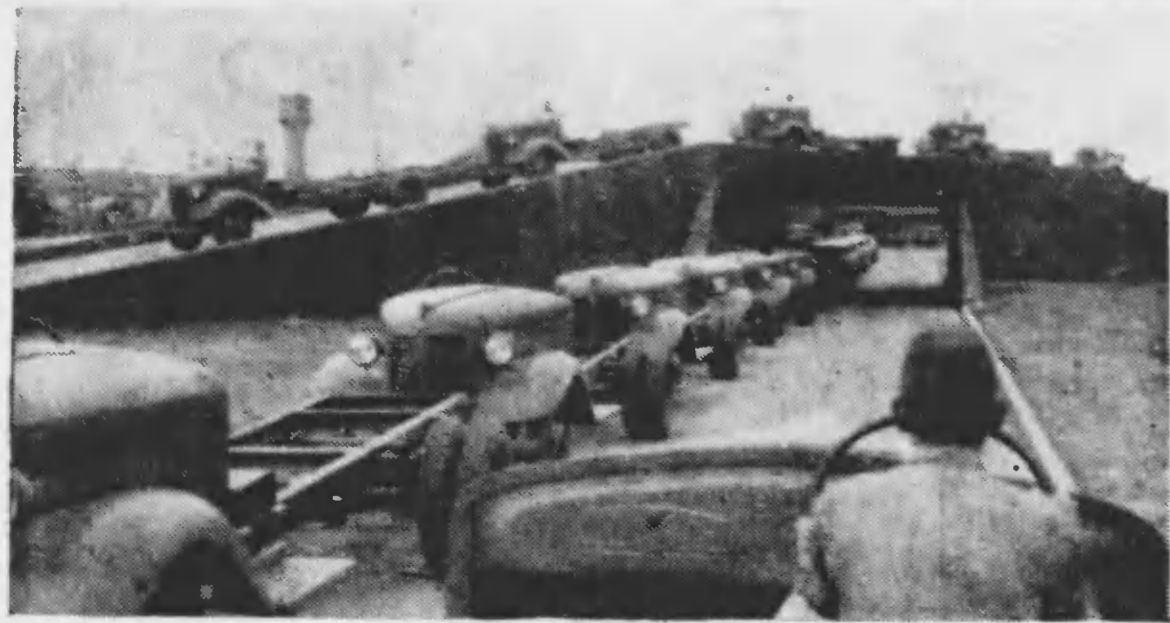
く裂を空冬く高も骨龍は船の利勝

撮影 石毛海軍報道班員

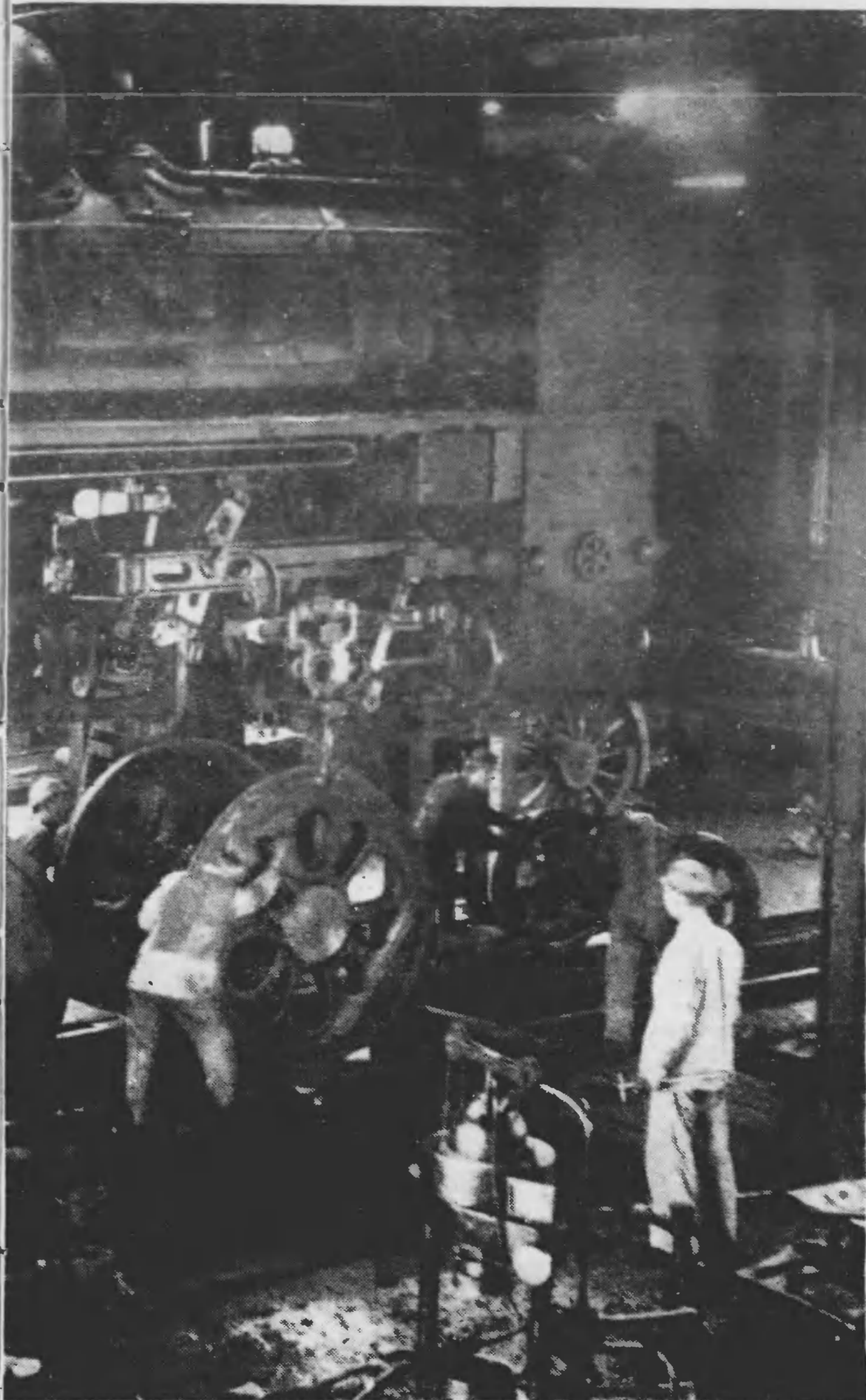
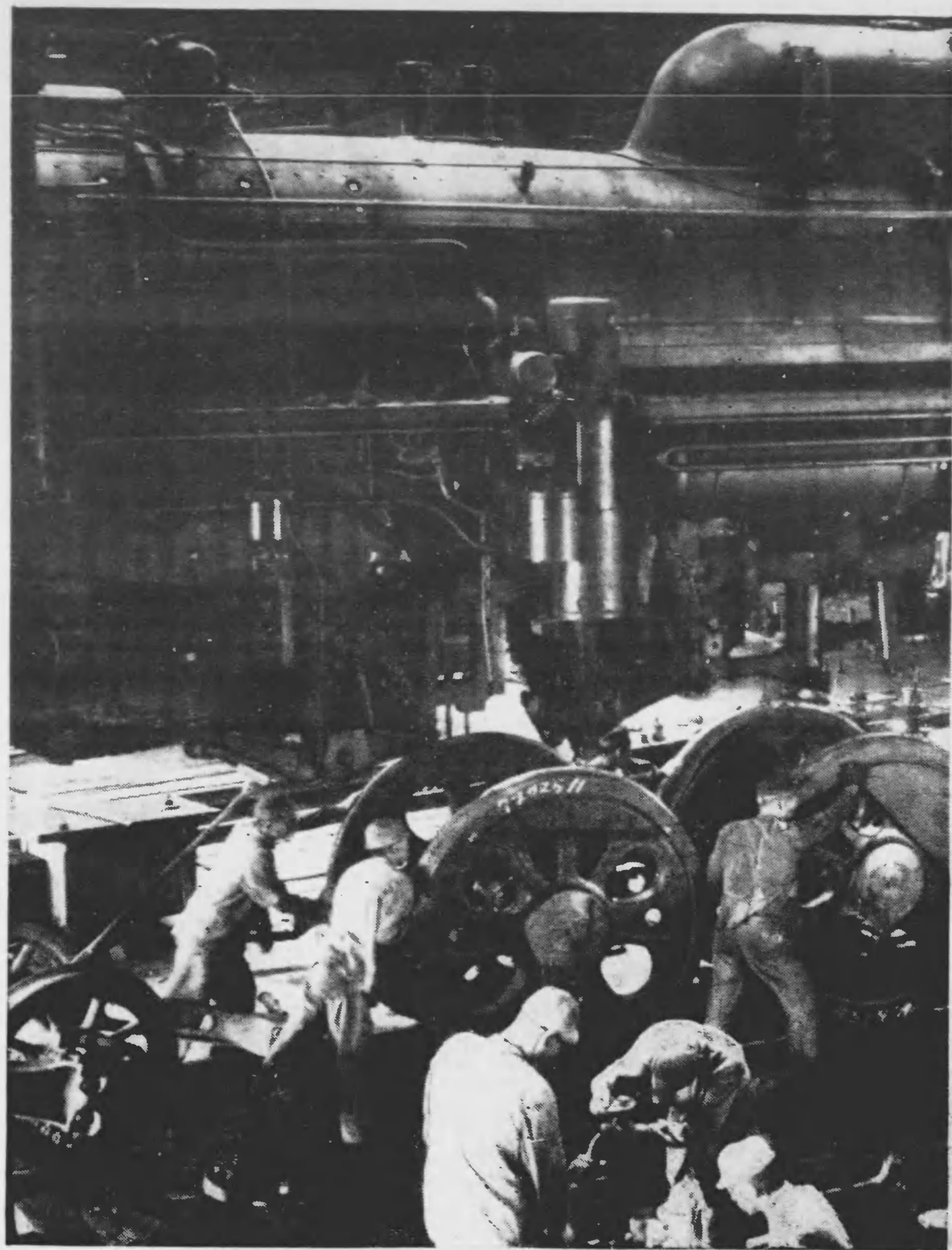


んせ造建を艦二は失を艦一れわ

撮影 石毛



軍用自動車
場を埋め
車
場
す
盡



戦時非常輸送に超強力機関車は
車輪がつけられた

大東亞領地資源の戦力だ

かつて南方諸地域は皇軍最前線の戦場であつたが、今日ではそれは戦略的基地と同時期に戦争遂行の動力的方面も兼ねて来た。即ち、世界産額の大半をしめるゴム、錫、銅、鉛、石油、タングステン、クロームなど、これらのもの、大半は戦前、米英に壟断されて軍需生産の重要な一面を占めて来た。だが今日、それらは完全に我が掌中にある。日本の戦力はこれを確保し、利用することによつて一層の實力を更に増強することになった。これと反対に、大なる物資と財力を誇つて過大に宣傳するアメリカの軍備も、戦争が長期化するればするほど、軍需生産に不可欠な一部資源の缺乏には深刻に悩まねばならぬ。

フィリピン

資源の開発のためには、作戦と並行して領土の確保と設備の整備を急ぎ、銅、マンガン、クローム、鉄、石油などは殆んど採掘に着手してゐる。南方領に於いては、ここに約五百萬トンの埋蔵量が認められ、クロームは埋蔵量一千万トンで世界一といはれてゐる。しかし従来、アメリカ植民地政策の犠牲となつてこの方面の開発は微々たるものであつたが、将来、開発が促進されれば其範圍の一環としてその存在は極めて大きいものがある。

ビルマ

年産六百万トン、ラングーン米で有名なビルマの米は戦前その六割がインドに輸出されてゐた。殊にイギリスは軍需資材のタンクステンと錫をこゝに求めてゐたから、皇軍占領によるイギリスの輸手は、インド反英熱の熾烈化とともに想像にあまりあるものがある。戦前イギリスがビルマ開発に五十億ポンドの巨費を投じてゐたのをみ

ても、いかにビルマを重大視してゐたかが分る。年産三十萬担の棉花をはじめとして、チーク材を主とする林産資源、さらに石油、鉛、銅、錫等の産資源にも多く恵まれ、これら戦争遂行資材の獲得には、軍民協力して目覚ましい実績をあげてゐる。

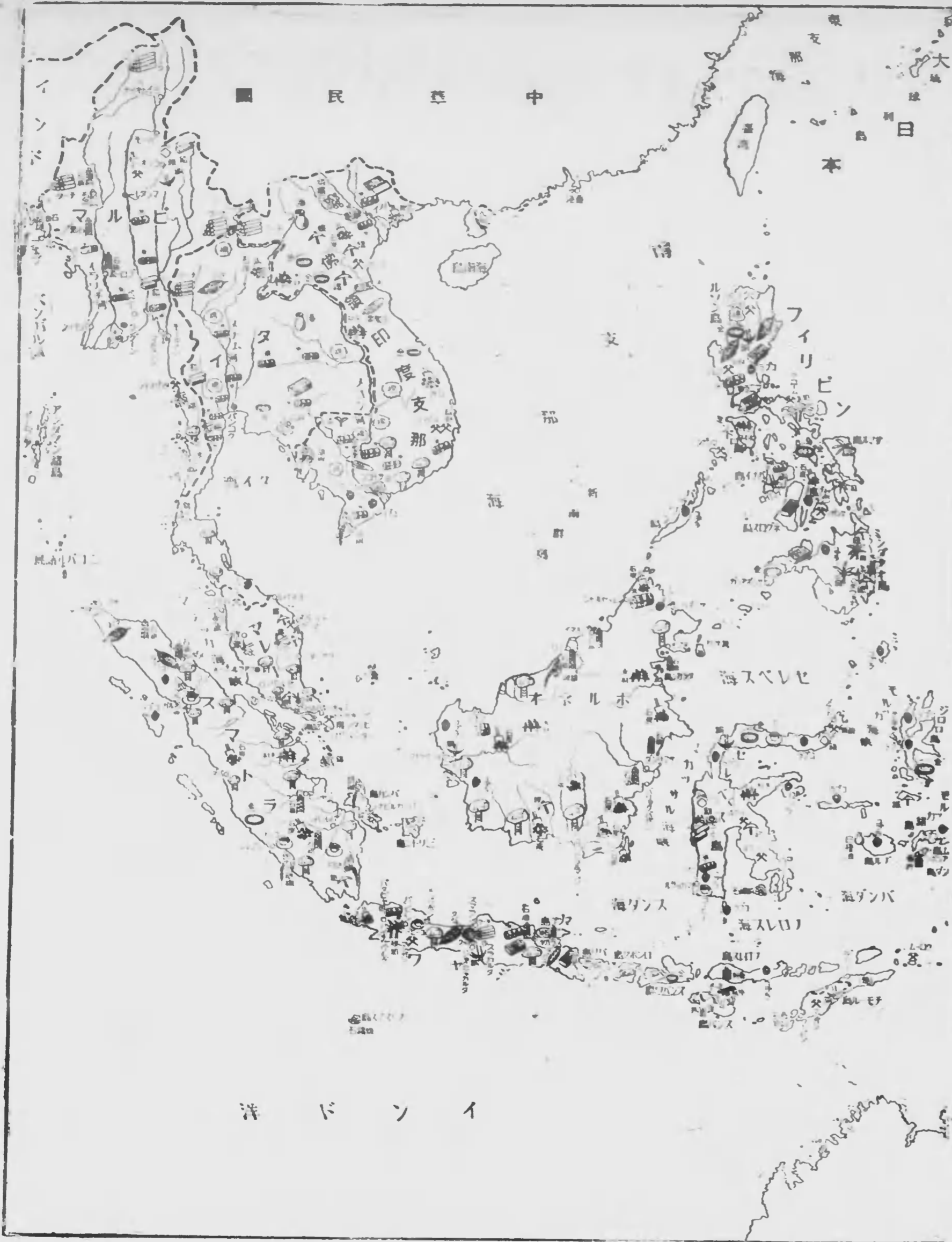
マレー

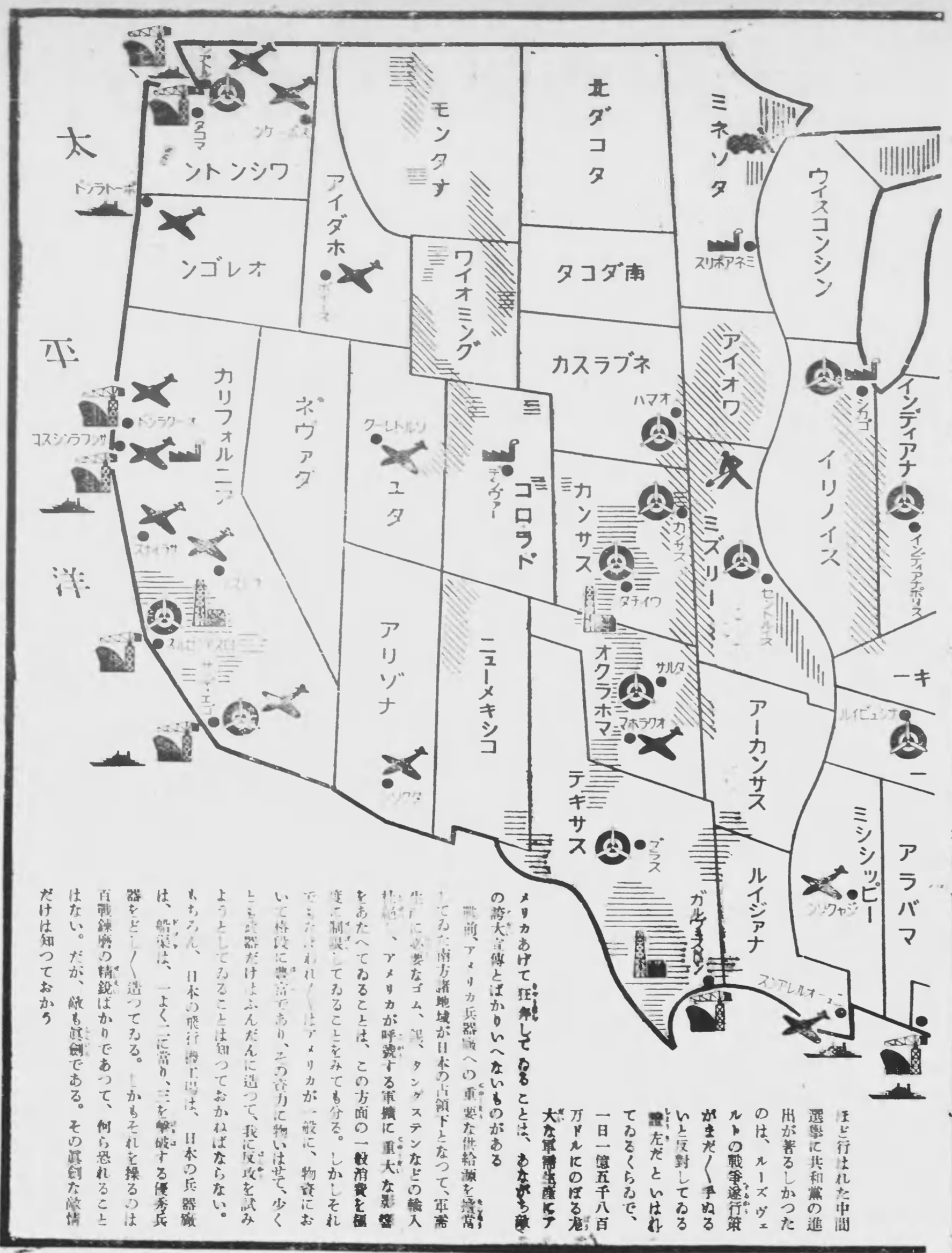
いふまでもなくマレーは錫とゴムの世界産額の大半をしめる産地であり、さらに東海岸の鐵、北部マレーのマンガン等極めて豊富であり、軍は占領と同時にこれら國防資源の取得に着手したが、今日ではマレーの、これら資材の内地送達も遂次成績をあげてゐる。

東インド諸島

ジャワをのぞいてはスマトラでもボルネオでも未開発の資源がすくぶる多く、殊に南方の資源といはれるスマトラの開発には、石油の採取を中心に軍民一致、積極的になつてゐる。石油はこの方面で戦前の年産八百萬トン、鐵錫の埋蔵量はボルネオ約二億五千万トン、セレス七億トン、スマトラ一千万トンといはれ、今後の開発に期待されるのは大きい。ボーキサイトはビンタン島に三千万トン、石炭はスマトラ、ボルネオで約二億トンの埋蔵量があると推定されてゐる。

皇軍の占領後、これら産業施設は着々充實され、物動計畫その他に必要な生産量を確保できる見通しがついてゐる。そしてさらにこれら産業建設、資源開発にあつては、従来米英的な植民地経営とはがらりと變つた新たな日本の性格が、もうがっちりとその建設面にあらはれて、人も物も戦争遂行、たゞこの一線をひたむきに押し進んでゐる。





ソロモン群島方面におけるアメリカの執拗な反撃といひ、アリューシャン方面の北方基地に對する航空襲撃といひ、いづれもわが方の果敢な攻撃、不動の防衛が敵をして再三再四の苦杯をなめさせてきてゐるが、緒戦の惨敗によつて、東亞に據拠を失つたアメリカも國內の戦時體制を急速に整備することともに、米海運線路を何んとか確保して、折さらば對日總反攻に出ようとする準備をさく急がない様様である。

『民主國の兵器廠』を自負するアメリカは、國民所得の五割に當る莫大な豫算を以て、軍備を強行しようとして、今年のはじめから航空機六万機、船八百万トンその他莫大な戦車、高射砲等の建造實現にあらゆる軍需工場を動員するとともに、ハワイ及びマレー沖海難の救済に鑑み、航空母艦中心の艦隊を再編成するため新造、改装を急いで大量空母の建造に着手したといはれてゐる。

開戦一年、大東亞戦争が長期戦としての深刻な様相を次第にあらはし始めると、アメリカの國民たちも、緒戦當時のまごつきから漸く覺めて、「今度の戦争にはうつかり負けられない」と思つてきたやうだ。實戰の

ほど行はれた中間選挙に共和黨の進出が著るしかつたのは、ルーズヴェルトの戦争遂行策がまだ「手ぬるい」と反對してゐる。露左だといはれてゐるくらゐで、一日一億五千八百万ドルにのぼる莫大な軍需生産にアメリカがあげて狂舞してゐることは、あなごも敵の誇大宣傳とばかりいへないものがある。

戦前、アメリカ兵器廠への重要な供給源を擔當してゐた南方諸地域が日本の占領下となつて、軍需生産に必要なゴム、錫、タンタムステンなどの輸入供給、アメリカが呼喚する軍備に重大な影響をあたへてゐることは、この方面の一般消費を極度に制限してゐることをみても分る。しかしそれでもなされぬのはアメリカが一般に、物資において格段に豊富であり、その資力に物はほせて、少くとも武器だけはふんだんに造つて、我に反攻を試みようとしてゐることは知つておかねばならない。

もちろん、日本の飛行機工場は、日本の兵器廠は、船渠は、一よやく三當り、三を撃破する優秀兵器をどしどし造つてゐる。しかもそれを操るのは百戦錬磨の精銳ばかりであつて、何ら恐れることはない。だが、敵も眞劍である。その眞劍な敵情だけは知つておかう。



例 凡

所船造	地軍機用軍
所鐵製	地軍要主軍海
油石	市都業工
炭石	所作製機空航
鐵	

ソロモン群島方面におけるアメリカの執拗な反撃といひ、アリューシャン方面の北方基地に對する航空襲撃といひ、いづれもわが方の果敢な攻撃、不動の防衛が敵をして再三再四の苦杯をなめさせてきてゐるが、緒戦の惨敗によつて、東亞に據拠を失つたアメリカも國內の戦時體制を急速に整備することともに、米海運線路を何んとか確保して、折さらば對日總反攻に出ようとする準備をさく急がない様様である。

『民主國の兵器廠』を自負するアメリカは、國民所得の五割に當る莫大な豫算を以て、軍備を強行しようとして、今年のはじめから航空機六万機、船八百万トンその他莫大な戦車、高射砲等の建造實現にあらゆる軍需工場を動員するとともに、ハワイ及びマレー沖海難の救済に鑑み、航空母艦中心の艦隊を再編成するため新造、改装を急いで大量空母の建造に着手したといはれてゐる。

開戦一年、大東亞戦争が長期戦としての深刻な様相を次第にあらはし始めると、アメリカの國民たちも、緒戦當時のまごつきから漸く覺めて、「今度の戦争にはうつかり負けられない」と思つてきたやうだ。實戰の

だのるゐてへ替り塗を圖地界世は々吾



例	凡
固軸交側軸權 (ム合ア地領占)	固軸權
固軸交側國合聯 (ム合ア地領占)	側國合聯
	立中

前大戦を世界大戦といつたが、戦密にいへば前大戦はやはり歐洲戦争であり、今度の戦争こそ、本當に世界をあげての、世界の歴史始つて以來の世界戦争である。

即ち、東亞では、日本を盟主として、日滿支タイの四ヶ國、即ち、全東亞の獨立國がガッチリ手を組んで大東亞新秩序の建設に邁進してゐる。歐洲では獨逸が中軸となり、ルーマニア、スロヴァキア、クロアチア、ブルガリアの諸國(以上三國同盟加入國)が歐洲新秩序建設のために戦つてゐる。

大東亞戦争と歐洲戦争とは、それ／＼東亞と歐洲の新秩序を建設し、それによつて世界の新秩序を建設しようといふ戦ひであり、この共同の目標の下に日獨伊の三國は、三國同盟にしてつかりと結ばれてゐる。戦争の目標からいつて、これは正に世界戦争なのである。従つて世界の各國は、好むと好まぬにかゝらず、固軸、反固軸のどちらかに色分けされる。

現に歐洲では、オランダ、ベルギー、ノルウェー、ポランド、ユーゴスラヴィア、ギリシャの各國は、ロンドンに亡命の西線政權ではあるが、當然たるドイツ軍の占領下にあつて、固軸色を以て塗らるべき地域である。フィンランドはソ聯打倒のために獨逸と手を握つて立つてをり、スペインは防共協定加盟國であり、共に固軸側の與國といふことができよう。被占領下のデンマークも親獨の國となり、ヴィシーフランスも度重なる米英の佛領領土に塔袋袋の糖を切つて、遂に米英との國交を斷絶するに至つた。

かくて歐洲大陸の全土は、殆んど固軸色一色に塗り潰されてゐるのである。東亞でも、關領の東インド諸島、米領のフィリピン、英領の香港、マレー、バスマ等から米英色を一掃して、全東亞に日本が固軸と塗り潰してゐる。

日本を中心とする東亞の國々、日、獨伊を中心とする歐洲大陸の國々、太平洋と大西洋をへだて、米英の國家群と戦つてゐるのが現在の戦争である。世界地圖は今日まで幾度となく塗り替へられて来た。しかし今日ほど激しく、世界地圖の全面に亘つて、その色を變へてゐることはない。かれ／＼はこの世界地圖が固軸色一色に塗り潰される日まで、闘争として戦ひ抜く決意を持つてゐるのだ。



ビルマを明ける和やかに

詩と文

井崎かずみ



水

ビルマ人は水の好きで国民である。われわれが許易するこの國の豪雨にも、彼等は一向驚かずに、平気で濡れて歩くのである。ドラム傘の野天風呂に入る私達を見て「あなた方は、よくその暑い水に濡れるものだ」と感心する。そして彼等はほとんど朝夕、ロンギを身につけて水をかぶるのである。ビルマ料理の饗には、きまづ一杯の冷水を、われわれにすすめる。

田舎の道路わきには、ところどころに小さな小屋を建て、水の入った壺を供へてある。ビルマ語でイェンセンといふのだ。これは旅人の疲れを癒す飲み水が入れられているのである。親切にもコップが備へてあったり、不潔ながら、腰掛けの置いてある所などもある。無論、内地の掛茶屋のやうに「お掛けなさいませ」五十銭いたどきませといふものではなくて、いはば主人のいな家無料休憩所といつたものである。道路があるところなら必ずこの備があるのだが、これは大層に美しいことだと思ふのである。(マンダレー街頭にて)



カーリン族 科正英論

遺棄車輛

敵隊を退る、とにかく敵の遺棄車輛の多いにおどろく。戦車、裝甲車、乗用車、トラック、おおよそ自動車に類するものなら何でも取捨へて置きます。といふ有様である。いづれも、さつくり返つて来た、河にはまつてゐたり、たゞのみに、おき、道なき草率の大樹の下へ、飛込んで行つて、モロに掃蕩を遂げた乗用車などを見かける。ちやうど、苗の方か走つて行つて車に突當つたやうなあんばいである。敵隊、後退したものであつたらしく、マンダレー街頭では遺棄車輛がわづら返つてゐるのを見た。どうしてかわけ、自走式自動車は戦場、最後を遂げたものであるが、モロにも馬車味の悪いものである。

プロミス、向ふ途中、ビルマ原住民が、敵の乗用車の轆轤をワザワザ外して行つて、掘立小屋の屋根にしてゐたのがあつた。

おもへば、イギリスもさんさん目に遭つたものである。(フローム街道にて)



ビルマ人の手摺み食卓 (詩と文)

森田芳治

ビルマ人の顔や格は大體日本人に似てゐます。女は束髪に簪等を飾り耳環をつけ、乳かきと白い布の腰巻の上に薄い白シャツをつけ、腰からはロンギといふ赤青とりのスカートのやうなものを懸つてゐる。食事は熱いものでカレー式のものでも、手摺みです。ばらばらの御飯を右手でうまくまわめて口に入れるのは内地のにきりすしを思はせるものがあります。

ビルマタバコ

ビルマ人は煙草好きだ。朝から晩までモウ／＼たる茶煙の中で暮してゐるやうなものである。男、女、子供までが好んでこの國獨特のセイといふ煙草を喫ふ。それは煙草の葉や茎を煮くちんで、木の葉に包んだごく原始的な煙草である。

谷てタイの汽車に乗つた際、指揮官から「この國の汽車は新を長く、路上無数の火の粉が飛ぶから、各自は火傷をしないやう十分に注意すること」といふ珍妙な告示をうけたものであつたが、このビルマ煙草を喫ふ際にもこの言葉がピッタリ當てはまるのである。ホッポに火をつけると、細心なる注意の下に喫煙しなければ、火の粉がホッポと落ちて、大きな焼け穴を出す恐れがあるのである。この頃では、私共の衣服には大抵二つや三つの焼け穴を持つてゐる。友人と見せ合つて「段々ビルマ人がソリセージほどもある太ききのセレを焼らすさまは、偉観である」(マンダレーにて)



汽車

ビルマの列車に乗る。このあたりは、ほとんどビルマ人はかりの手で運行する列車であつた。

情で、およそ時間的勞働に堪へられさうにもないビルマ人達が、新らしい赤塗の下に、汗水を流して立働くさまは、何か不思議なものを見せられたやうであつた。

線路のよくないこの國の列車は、居心地の悪い地獄をたてゝ進行する。脚のない途中の無落へ下車する乗客のさまは、列車はこゝろ、どしどしにじり、そ、そ、そ、外づ大きな荷物をはより投げてから、キをら、飛び降りるのだつた。ごく初等級のバラシート部隊のはたれ葉みたしものである。

ルメットをかぶり、例のロンギ(腰巻)をはいたビルマ人車掌が選考と機を振るときは、はじめての私達をびっくりさせそのに十分だつた。(モニワにて)

日の丸の旗

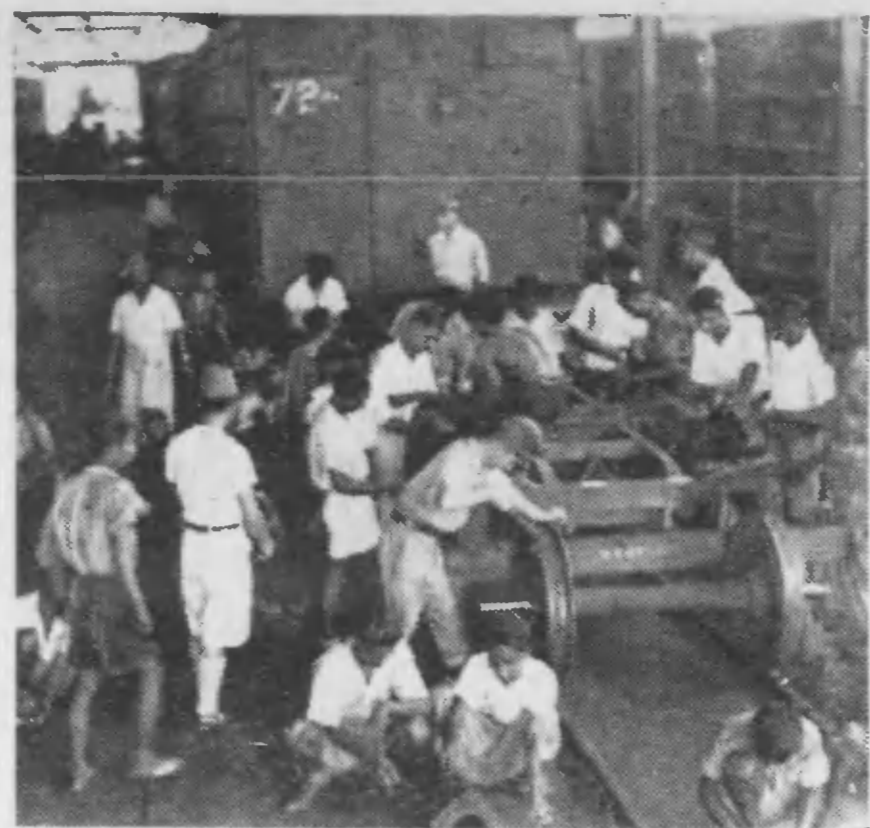
外地で見る日章旗は、確かに感激である。サイゴンで初めて多くの日本船の日の丸を見たとき、私共はみな甲板へ断つて、ヒノマルダ、ヒノマルダと子供のやうにはしゃいだものだつた。

いま、私共は、ビルマの東地で再びこの感激にひたる。——

原住民の作つた手摺の日の丸は、決して正確のものではなかつた。白地の片間に、ヤマゴロのやうに小さな赤丸をつけたものや、ほとんど四角な赤地を編み込んだ日の丸だつたり、ひきするやうに長い日の丸だつたりした。——が、私共はそれを少しも滑稽だと思はなかつた。あふれるやうなこの街の日の丸の美しさに、たゞもうワットリと満足するであつた。ふと「シロチニアカタ……」の歌などが思ひ出されて、無性に故國が懐しくなり、無性にそれからそれへと歌いて「あゝ更科のそはが吸ひてえ」といふ奴が出た。——「俺はタタマンボリで茶漬がいふやうな、内地のはなしになる」と、誰かがすつかり機嫌がよくなつて、ニコ／＼したのであつた。(マイモにて)



ビルマ人は煙草好きだ。朝から晩までモウ／＼たる茶煙の中で暮してゐるやうなものである。男、女、子供までが好んでこの國獨特のセイといふ煙草を喫ふ。それは煙草の葉や茎を煮くちんで、木の葉に包んだごく原始的な煙草である。



り通姿の

に徹してゐるのだから。またビルマでも、大東亞戦争の勃發を豫言し、日本によるビルマ民族の解放を信じてゐる者が少くなかつたと聞く。

かういふ歴然たる事實を、米英の指導者たちに知らせてやりたい。米英のアジア撤退こそは、アジア全民族の永い間の金鎖であつたのである。

現在、占領地の治安に全然不安がないのも、彼等の念願にこたへる要諦なればこそであつて、斬らしく皇恩に浴することになつた住民たちは、心から皇軍將兵に協力し、最後まで建設戦を戦ひ抜かうとしてゐる。

敵が破壊して運搬した貨車の修理に専念するビルマの技術者 上着

マニラの鐵工場は殆んど全部操業を開始してゐる。元氣一杯の能力のハンマーを振ふ比島工員

海軍航空隊の基地で飛行機整備に大忙しの現地住民



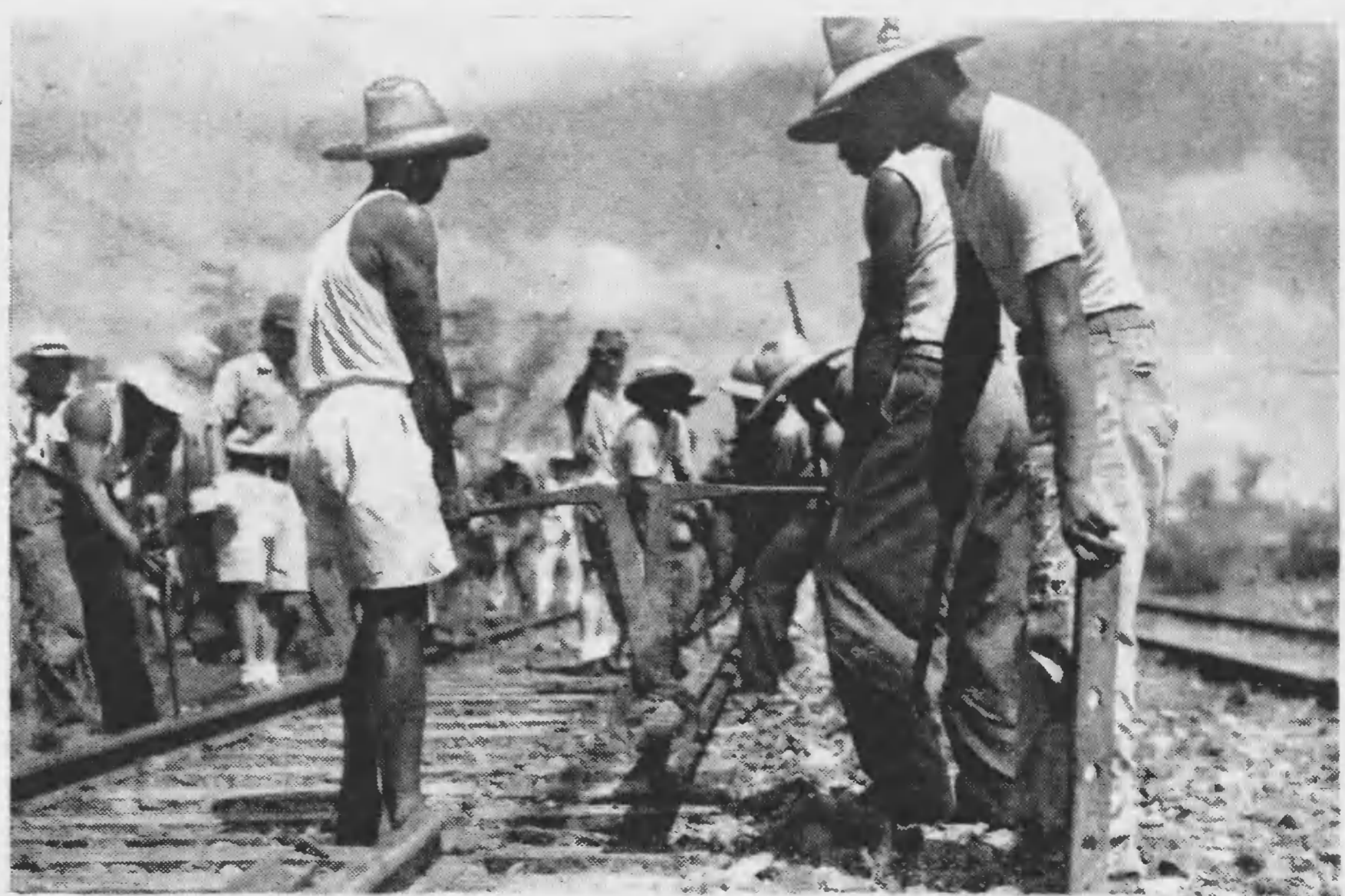
字文栄共

わが海軍若下幹部隊のメナド奇襲の發表があつた當時、『空の神兵』と原住民にまつはる微笑ましい挿話が傳へられた。それは、久しい以前から住民の間に、われ／＼は何時か必ず解放される。その時は空から神兵が降りてくる。といふことが信ぜられてゐたといふのである。後になつてあの壯撃のニュース映畫が、メナドの映畫館で上映された時、見てゐた住民たちは、床を踏みならし、歡聲をあげて、物凄いはどりの興奮ぶりだつたといはれる。『神兵天降る日』の喜びが、彼らの骨身に

チモール島クローボンの兵士、一生懸命荷物を運ぶ。現地の住民が運ぶ。現地の住民が運ぶ。

町役場の職員もかひなく通行人の豫防注射に活躍するビルマ婦人上左

比島鐵道の迅速な復舊の努力。現地の住民の協力。





「コドモフタ、イカサカ、サスイデスヨ」と娘さんなかく連発だ



市民から親しまれてゐる女遊園も閉鎖前には元気にラジヲ聴いた



大型バスが市内を走るやうになつて市民の足が楽になつた



停留所も車内もきれいな電車の運行

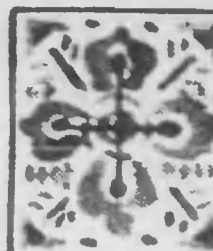


「ヴァルガス行政長官も率先カタカナを覚えはじめた

一年の歳月が二ヶ月の如く



「モトローカイノソラアケテ」日本舞物のレグニーが比島人の間にも大流行だ

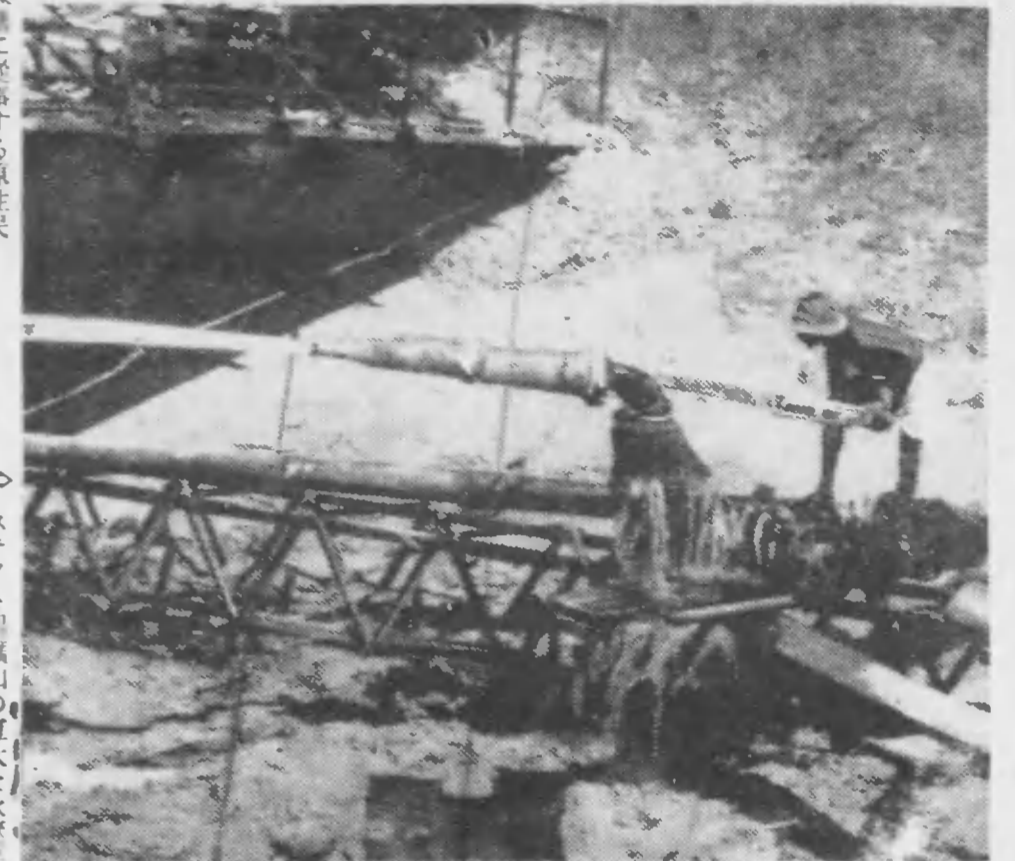


飲んで、唱つて、踊つたアメリカの享樂的方面をもつて最上の生活としてゐたマニラの市民にとつて、皇軍占領後のマニラの變りやうは實際、彼等の從來の考へ方や、事し方を根柢からひっくりかへすほどの激變だつたに違ひない。だが軍政も、ヴァルガス行政長官を先頭に、新生マニ

ラの鼓動は、今日では着實に一歩々々、共榮團の一環としての力強い響をつたへて來てゐる。街を見ても、人を見ても、そこにあふれるものは更生一途、日本へのひたぶるな協力態勢にはかならない。そしてそこに指導者としてのわれわれの重い責任もあるわけだ。撮影 船井隆軍報道班員



◁ パケケールブル錫鑛山で採掘に従事する原住民



◁ スタイト錫鑛山の巨大な水庫

マレーの錫とゴムは戦いのために掘らねばならぬ。世界第一で、かつては「イギリスのドル箱」といわれてきたものだ。このうち錫は戦前、世界産額の四割五分を占め、年産約七万トン、しかもその最大の消費国は他ならぬアメリカであった。軍は占領と同時に破壊されてきた施設の復旧を急いで、いち早くその獲得に着手したため、生産は急速に回復して、すでに軍政監督の指導のもとに、工場、鑛山の経営を委託された担当者が生産に全力を傾けており、必要量の内地送還も豫定の進捗を示してゐる。

かくて、いまや大東亞は、米英の抗戦力に缺くことのできないこの軍需物資を抑へて、資源作戦においても世界的の武器を奪つたわけだ。

◁ パケケールブル錫鑛山の採掘、運搬状況



◁ セラゴール錫鑛山の大型な掘削作業



◁ バトセラゴール錫鑛山の洗選機

やさしく手をとって 教へてくれる兵隊さん

働くこと、それは人間の中でも最も下等^{げらう}に属する者たちのすることだ。ごらん、アメリカ人も、イギリス人も、オランダ人も自分たちはなんでもしないで遊んでゐるではないか。自らを劣等視した南方住民のからした観念はひと度、日本軍の占領下となるとがらりと一変した。戦争にあんなに強かつた日本の兵隊さんは實によく、

しかも喜んで働いてゐる。今日では、捕者^{とらへり}だつたマレー人もフィリピン人も、やさしく手をとつて教へてくれる兵隊さんや軍政部の人たちのおかげで、働くことの上^{うへ}のことが解るやうになつてきた。我々の合言葉である職場の眞實取組はもう南方原住民たちにも建設のあらゆる方面に美しい協力となつてあらはれてゐる

撮影 陸軍報道班



「しつかりから握つてかり押す」と製本工場のインド人に皮のなめし方を説明するラングリン



「大部うまくつたなア。よし、そこでねぢる」修理工場に来る故郷軍が大々とかたづくマニラ



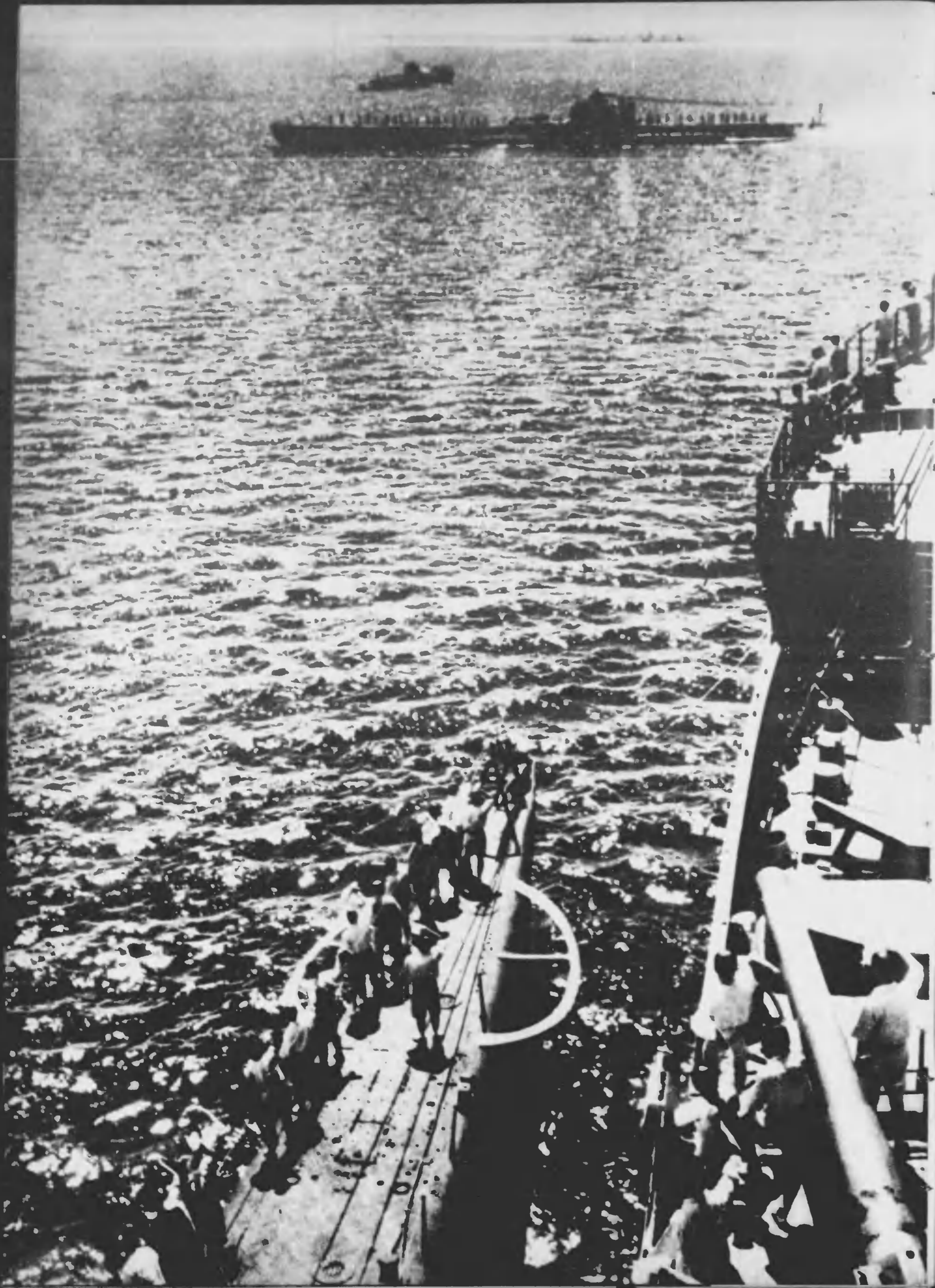
「軍政部長がわざわざこんな遠い地方まで出張して来て畑のつくり方を教へる」スマトラ・メダン

「いいかい、そこではあんとをいれて……」おいしいおまんこちゅうのこさへ方を軍で働く少女に教へるラングリン



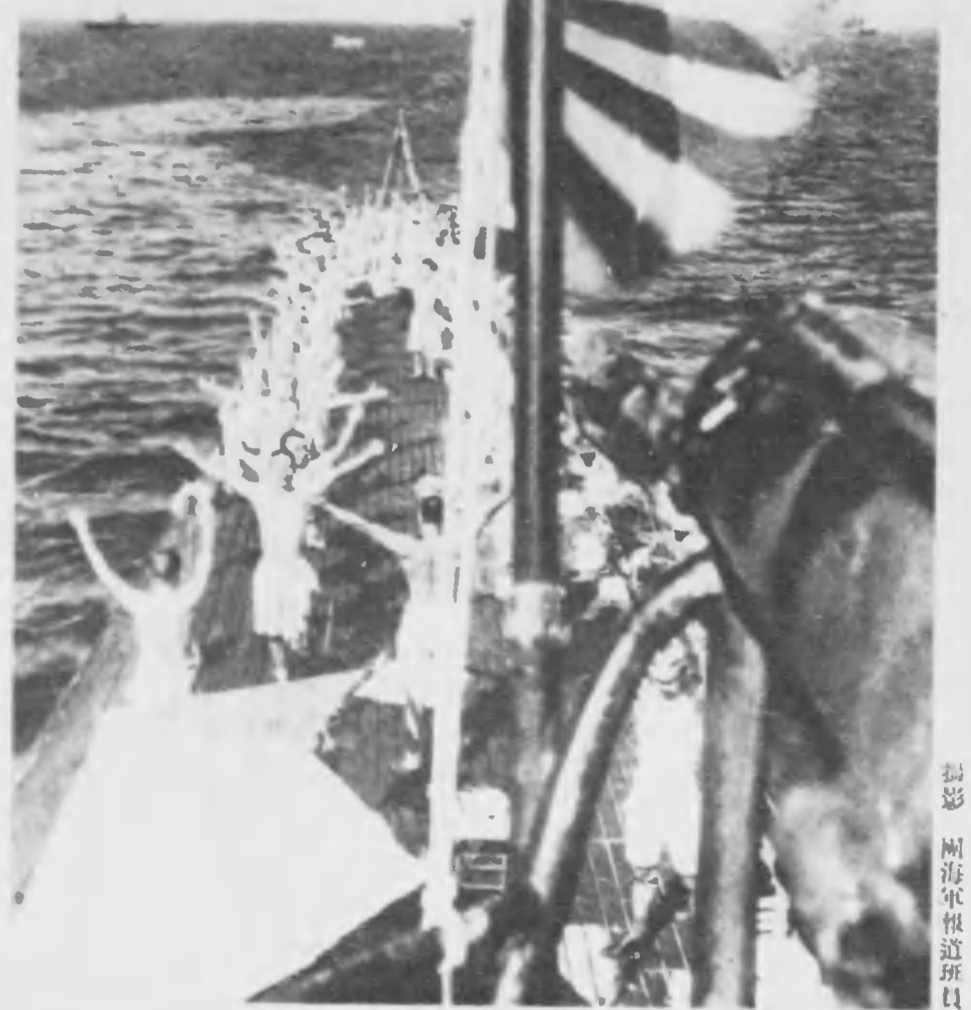
病院では現地の娘さんも日本の看護婦さんに何かと教はりながら元気に働いてゐる。昭南





たへ迎を年二第てしにやのこ

隊戦水潜



撮影 剛海軍報道班員

◯ 敵の武備を知らず、基地に歸還した潜水艦乗組員は強烈な太陽の下、明日の出撃に備へて静を無る
 ◯ 僅かに潜望鏡を水上に出し、潜水艦は潜航する
 全太平洋を歴し、インド洋を制海權下に收めた帝國海軍が、その満々たる餘力を潜水艦に歸つて遠く大西洋の彼方にまで出撃したことはまだわれ／＼の記憶に新たなところである。出でては何物をも撃たずば止まない帝國潜水艦隊は、不沈艦といひ、不敗の圓型陣といはれた敵米英艦隊を屠り、或ひは敵新網艦隊を索めながら通商線の破壊に黙々と挺身し浪いよ／＼高まりつゝある七つの海を縦横に蹂躪してゐる
 ◯ 敵軍艦隊は！わが潜水艦は砲撃戦を開始する
 獲物は何ぞ！戦友に送られ、わが潜水艦は母艦を離れて去々と出撃する





□ 夜はじつへかまな表態を同じって銃剣術の猛訓練 フィリピン

□ 深夜襲撃として準備の任につく皇軍勇士 フィリピン



隊部軍陸 たへ迎を年二第てしにうやのこ



□ じつと目標に注ぐ眼にともしれば汗がにじむ ビルマ前線の砲陣地
□ 巨砲火を吐く砲隊の射撃演習 ビルマ前線



シンガポールが陥落し、戦勝第一次祝賀の二月十八日、われはあの日の感激を移生忘れることができない。それから続く間に、全蘭印の掃蕩が成り、ビルマもわが手に歸した。そして三月十五日第二次戦勝祝賀の日も、マングレーが陥ちた日も、われは心から『兵隊さん、有難う』と叫んだ。現在南方地域の戦事は緒戦を終り、既に建設戦の段階に入つたといはれてゐる。だが、兵隊さんの御苦労はちつとも變つてゐない。占領地域の治安が微動もしないのも、軍紀厳正、よく新しい建設に挺身する皇軍將兵に寄せてゐる原住民の限らない信頼が、與つて大きな力となつてゐるのだ。なほ敵が徒らに呼號する奪回の夢をたち、常に新しい進撃への態勢を整へて日夜猛訓練を續けてゐる皇軍將兵に、どうして寸時の憩ひがあらうか。われわれはさらに兵隊さんの御苦労を偲び、勝ち抜く第二年月への覺悟を固めねばなるまい。

戦国 戦国 生活 生活

その額に刻む幾すぢの深い皺は、雨に憂ひ風に痛む作物への心勞を示し、その節くれた骨太の手は、戦時日本の兵站基地をまもつて黙々と敢闘を續ける肉體の勞苦を物語る

お天道さまの光を拜み、萬物の母ともいふべき大地を耕す度しやかな土の營み、そこに日本精神の根源地としての農村があり、健兵健民の供給地としての田園がある。夫を戦線に送り出した若い妻が、わが子をこの國の柱として捧げた老いの身が、そして次代をうけ繼ぐ小さな魂が、いまみんな火のやうに一つになつて闘ひ續けてゐる農村の姿を、富士の高嶺を仰ぐ山梨縣山梨村の一農家から拾つてみた

いふまでもなくこれは農村における戦時生活の總てではない。だが人の力と物の力、天の恵と地の恩。それが一つに融け合つた尊い農民道をふみ行くところ必ずや身近な共感を呼ぶものがあり、省みて學ぶに足るものがあらうと信ずる



「家内揃つてお天道さまを拜み、土に祈り、この大時代にめぐり合つた有難さ、今朝もちつくり味はひびく」



「お父さんお姉ちゃん行つてまいりませう」通學する子供たちの世界にもいつか見事な組織化が、野良には薪柱を踏み碎いて共同耕作がはじまつてゐる

かつては消費と享樂がその生活のすべてであるかのやうにみられてきた都會の生活もたしかにその姿を一變した。だが然し、なほその奥底にかつての米英思想に蝕まれた生活態度が蠢動してゐるすまいか。個人主義、享樂主義がその生活の總てであつた敵アメリカ人さへ、心掛けを更めて我々に立ち向はうとしてゐるのだ。負けてはならない。戦ふ日本の心臓であるわが都會にこそ米英人輩に眞似の出来ない最高度に張りつめた戦争生活が營まれねばならない。大厦の陰に射す僅かな朝陽を浴びて差しのぼす双手が健民を生み、白い手に取つた鋤の耕す額額の土も食糧の自給増産に、ひいてはこの國土につながる祖國への愛を燃えさせたせるのだ。戦ふ都會。そこにかくあるべき必勝生活の幾面かを帝都一市民の日常にみよう



朝の訪れだ。朝霧よんで元氣よく打振る腕に「ジョーが叫ぶ。戦ふ日本の健民」



「いつてらつしやい」集團登校の列から一列乗車の父親へ、そして一列乗車の父親から微笑がかへされる。出勤に登校に新秩序はまづこゝから

「それでは手分けして畠を耕すんですが」と、女學生の「お母さん部隊」に一番下の子供を預けて、主婦も忙がしい野良仕事へ



「けふもまた男士を送り出す妻や妹の熱氣な涙が、この山峡に本響する。主人も野良者に羽織がけで村はづれまで見送りに

増産はまづ肥料からと、取りたく落葉を掻き集めて堆肥の増産に小さな力を合はせる國民學校の可憐な熊手部隊。一番末の女の子もこの組だ



撮影 吉田 榮

大詔奉讀日の訓示に響きいりながら常に心ひそかに奮ふのは、奮すべきを盡して國の御稱となるといふことだけだ、戦さの崖に立たぬ我等も



富士子ちゃんもお國のお手傳ひです。新嘗祭には新米の特配ですつて。回覧板が新穀への感謝を調へる

職場こそ本當の戦場だ。有閑の二字を抛つた娘も親切部隊のマーク時らかに父親の職場に奉仕の日をおくる



「やり繰りしたらまたこんなに衣料切符が餘つてゐますわ」「ちやんぱん納さして覗きませうね。これも私達でできる立派な御奉公よ」



ここの中に
ありあ斐甲生



戦地の息子から手紙が届いた。一字一句に読み出てゐる真実の熱誠は、読む者、聞く者の胸を胸には雁打つ高い情感が交錯する。



西貢を去る前、三里の上り下り、鉄線先頭に木炭搬出奉仕の乙女部隊ががっちり組んで、近づく冬への数回だ。



農作に有終の美を飾る新米の供出に、農具倉庫の前は牛車や大八車で氾濫する。土人も車の後を押して米俵の山を運びこむ。



銀座といへば消費と娯楽の精華だつた。だが今日の街を通りかゝつたこの家族部隊は彈丸切手を買つてゆくのだ。



「歳をとつたつてまだ、飯ぐらひにきれるて」裏の空はせまいけれど口給のキャベツも丸々と太つてゆく。



街をゆくこの家族は百貨店の飾窓や映畫の看板のかはりに、國策展覽會の跡に足をとどめた。



高軍地に響く力の安樂曲。青少年團の勤勞奉仕に息子を閉鎖の扉を揺る。桑の木に鈴なりの辨當箱ももろもろく口をあける十一時。



澄みに澄む秋空の下、秀麗な富士を仰いでみ賞は鎮成する。擇種操に強切る四番目の息子は國民學校の五年生だ。

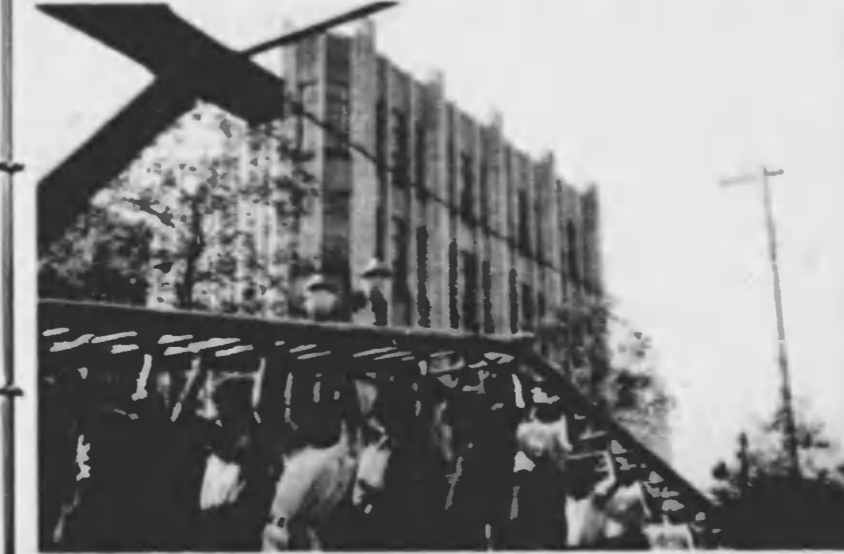


勤勞を終つたおひつこの隊列。「いつでもこの共同炊事場へ、」をばさん敷いていきますよ」と優しい一帯樂りは鉄線が。

戦国時代の生活



「えい、三上さんこと大塚さんこと、あら石川さんことにおまが足りないわ」當番の野菜共同買出しにこの團組の消費生活は明朗だ。



ビルディングにかこまれた運動場だが鎮成には十分だ。弱い聯合の子供達。そんな言葉は昔の言葉だ。



このお釜や鍋が軍艦や戦車になると思ふと供出もちつとも惜しくありませんわね。お國のためですもの。

今日、戦ひて僅かに一年
 民、われら故國に在るもの
 いよいよ旺盛なる闘魂もて
 日常の生活の中にも敵と戦ひ
 日々の言動の中にも敵をいましめ
 一死大詔に應へ奉るのみ
 今日、戦ひて新らしき、更に甲斐ある
 第二迎ふ



一年の勞苦が實を結んでお米の検査にも見事合格し
 た。はじめて報いられた喜びに隣組の共同風呂は
 「お疲れさんで」の聲も明るい。



何んといつても食糧増産は農村に課せられた一番の
 御奉公だ。農會の若い指導員を招いて、こんやはお
 米の増産常会。主人も熱心に説明を聞く。



朝は朝倉へ、午は牛小屋へ。雪爐裏火を囲んで楽しい夜なべ仕事。子供たち
 は可憐な童心を慰問後に一杯に。戦ふ力を蓄へて大詔奉戴日の一日がくれる。

戦 國 の 戦 の 生 活



夕べも近い。忙がしい主婦を中心に一家総動員で家事が處
 理される。かうして少國民速も健實に働かれてゆく。



「皆さんの御協力によりまして當第三十隊隣組は優良隣
 組として表彰されこの記念品を贈られました」常會の席
 上、組長の報告に期せずして拍手と和やかな笑聲が湧く。



★表紙
 民一億の總帥として大東亞
 戰爭をあくまで戦ひ抜く鐵石
 の決意、固き東條内閣總理
 大臣の英姿である。胸開を飾
 る勳章は旭日大綬章、勳一等
 瑞寶章、功二級金瑞寶章を以
 じめ聖野瑞、存、中國、滿洲
 國、タイ國から贈られたもの
 である。これは三色同時撮影
 による天然色寫眞原板から印
 刷用赤青黄黒の原板四枚を作
 り、これによつてオフセット
 四色刷として天然色に再現し
 たもので、わが國のグラフ表
 紙としては最初の試みである
 海軍關係寫眞の複製複製は海
 軍省承認済(第五二四二號)

お知らせ
 本誌次號(十二月九日發行)も大
 東亞戰爭一周年記念第二特輯とし
 て南方占領地域の現況寫眞を紹介
 致します。

だんがんきって



一枚二圓

- 第七回賣出
十二月一日→十五日
- 抽籤日
十二月二十一日
- 割増金
一等千圓以下多數
- 當籤率
十一枚ニ付一枚ノ割合

抽籤の済んだ切手は五枚以上まとめて郵便局へお差出しの上、特別据置貯金證書と引換へて下さい。

内閣印刷局印刷發行

本號を戦地にお送りになる場合には送料は内地と同様で封あるひは開封にして第三種と明記すれば、一部二錢です。

所 達 申	價 定
全國各地官報 販賣所 書店・驛賣店 新聞販賣店 寫眞材料店	本號に限り 二十錢 (送料二錢) 一部十錢 (送料一錢)
▲特天號の場合は其の都度御申込金より差額を申受けます	▲外國郵送に依る地域は送料共一部十九錢
	▲預約配達御希望の方は一部十錢(送料一錢)の割合を以て前金を添へ御申込み下さい

寫眞週報 (禁轉載)

昭和十七年十二月二日印刷發行

編輯者 情報局

東京市豊町一丁目

永田町一ノノ一

發行所 内閣印刷局

東京市豊町一丁目

(対価紙週・A4規格定額はさき大の書本)